

議員派遣等成果報告書

那賀町議会議員 株田 茂

去る8月31日、9月1日に議員6名（山崎、山上、照原、連記、久川、株田）で視察に行ってきたので報告いたします。

視察場所・目的

- ① 8月31日 滋賀県農政水産部水産課
琵琶湖におけるブラックバス対策
カワウ対策
- ② 9月1日 京都国際マンガミュージアム
マンガ図書館の現状と問題について

- ① 滋賀県庁にて、農政水産部水産課水産振興係 関主査より説明を受けました。

滋賀県では外来魚対策は水産課と環境部琵琶湖政策課の2部門で、水産課は漁業者を、政策課は遊漁者を対象とした事業を行っています。

琵琶湖では1960年にまずブルーギルが、1974年に北湖でオオクチバスが確認されましたが、1979年には全湖で確認されるようになりました。1980年にはオオクチバスが急増しましたが、諸施策が功をなしてオオクチバスは減少し、ブルーギルが増えています。ブルーギルは在来魚と食性が同じなので、在来魚を圧迫する原因になっていました。

水産課では琵琶湖にある30漁協（沿湖漁協10、河川漁協20）のうち、沿湖漁協対象に1980年より駆除対策に取組みはじめました。

主な事業としては、外来魚駆除促進対策事業（事業費7,600万円、捕獲目標200トン）、外来魚繁殖抑制対策事業（事業費240万円）、外来魚回収処理事業（事業費1,878万円）、外来魚産卵期集中捕獲事業（事業費630万円）、外来魚駆除フォローアップ事業（事業費651万円）、なおこれらの事業費は全て県費ではなく、事業により全国内水面漁連からの補助を受けているものもあります。

その結果、毎年170トンから500トン駆除しており、外来魚の推定生息量は2007年4月の1871トンピークに2013年4月には990トンにまで減少していましたが、再び増加に転じ2015年4月では1240トンと推定されています。

政策課では琵琶湖ルールなるものを定め、遊漁者の協力を求めています。

4ルールあるが1～3はプレジャーボートの規制で、外来魚のリリース禁止を定めたルール4が本命であります。そのために「滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例（2003年4月1日施行）」を制定されています。

そのために外来魚回収ボックス、回収いけすを設置し、定期的に回収し、焼却や

堆肥化などの処理を行っていました。

外来魚つり上げ名人大会や、キッズ釣り大会（知事賞もある）、法人のイベントとしての釣り大会（道具一式貸し出し）の誘致などを行っており、成果（年間十数トン）を上げているようであります。

又、キャッチ&イートとして、学校給食や県庁食堂に提供していましたが、調理に向く大型なものが減少し、現在は実施されていないということでした。

カワウには、2015年5月時点で7659羽生息していると推定しており、営巣地対策事業（事業費1,338万円）、飛来地対策事業（事業費497万円）を実施しており、2014年には5020羽捕獲の実績がありました。

最初は散弾銃を使っていましたが、最近はエアライフルになってきているそうです。

滋賀県では早くから外来魚対策に取り組んでいます。絶滅とまではいっておらず、ある程度以下に抑え込みつつ、在来魚との共存を図っている感じでありました。

つまり、将来にわたり、これらの経費と手間を掛けていかなければならないと思いました。逆に山梨県の河口湖のように漁協が遊漁券（遊漁税付き）を販売し、ブラックバスのメッカとして賑わっているところもあるそうです。

那賀町としては、どちらの道をとるか、無駄な投資を避けるためにも、地元漁協、企業局と相談し、方針を決める必要があるのではないかと思います。

ブラックバスはどんな味かと思い、唯一提供している琵琶湖博物館内の「にほのうみ」で昼食としてブラックバス丼を食しましたが、白身の柔らかい魚であって、美味しいと感じました。

② 京都国際マンガミュージアムにて、勝島事務局次長より説明を受けました。

京都精華大学のまんが学部の付属機関（博物館）として運営されており、建物は元京都市立龍池小学校（明治2年創設）で、昭和4年に現存建物に建て替えられているとのことでした。そして平成7年（1995年）閉校となり、平成18年よりミュージアムとして運営されています。

何故、マンガ図書館ではなくマンガミュージアムなのか、何故、京都なのか、説明を受けましたが、一種のこだわりというか自負を感じました。

初期投資額は12億円でありましたが、内改装に7億円を要したとのことでした。

入場者数は年間29万人（内外国人5万人、内フランス、中国各8千人、アメリカ7千人）で入場料800円徴収していますが、赤字経営とのことでした。集客率を上げるためにいろいろな企画展を随時行っているとおっしゃっていました。

いたずら、盗難予防のためには職員が巡回しており、現在は研究員も含め職員数は20名とのことでした。

蔵書は30万冊で公開は5万冊で、25万冊は地下書庫に保管しています。海外のマンガ本や外国人のために英訳展示もしてありました。構内にはショップやカフェもあり、土産物や軽食が取れるようになっていました。

特筆すべきことは、地元との繋がりを重視しており、一部屋は元龍池小学校の教室として残し、小学校の歴史を保存してありました。地元の人に集会室やグラウンドも開放しているとのことでした。

翻って、藤田氏が計画している案を考えた時、いくつかの問題点があるように思われます。

まず運営主体や蔵書管理であり、集客面でのアクセス、来館者への飲食の提供など、又、他に広島県に広島市まんが図書館（分室も含め18万冊）、東京都新宿区に現代マンガ図書館（18万冊）があり、どのように差別化を図っていくかが問われることになると思います。